



図2 アイルランガ大学病院にて
前列左より岡田, Bambang 教授, 野村

は、遠い島からも紹介されてくる脊椎カリエスの症例患者で溢っていました。滞在中に見学した手術はすべて脊椎カリエスの症例で、胸腰椎前方アプローチによる病巣搔爬後、二期的に後方固定術を行っていました。スタッフはみな腰椎前方アプローチに習熟しており、なかでも Bambang 教授の経腹膜的・経胸膜的前方固定術は非常に丁寧で分かりやすく、大変参考になりました。滞在中は若い医師から日本での治療方針について多くの質問を受け、彼らの熱心な姿勢に心を打たれました。Bambang 教授は親日家で、これまで43人の fellow を日本へ留学させていました。そのため、日本滞在経験のあるスタッフが多く、留学していたときは日本で親切にされたと感謝していました。

インドネシアは盛んな経済発展の一方で、まだまだ栄養不良や不衛生な環境が多く見られました。脊椎カリエスの患者さん達は10~20歳代にも関わらず、痩せて低身長でした。移動中の車から垣間見たスラム街では、多くの住民が水はけの悪い不潔な環境で生活していました。トイレトペーパーは手術室のトイレにも設置されておらず、手桶と水の入った水槽と、ホース付きシャワーが置いてあり、床は水浸しでした。われわれは“不浄の手”を実践する勇気を持ち合わず、頂いた紙を使用しましたが、異文化を肌で感じました。一方で、郊外には約10億円の豪邸が立ち並ぶエリアがあり、美術館のような巨大な建造物もありました。香港から帰国して1週間後にスラバヤを訪れたため、どうしても両国の比較をしてしまいましたが、香港よりも貧富の差が大きいと思いました。

Bambang 教授, Denny 先生, Lukas 先生から毎日インドネシア料理を御馳走になりました。ほどほどに辛

く、且つ、やや甘い味付けで、どれも大変気に入りました。しかしながら、最も強烈だったのは、Bambang 教授お気に入りの“Soto Madula(ソト・マデュラ)”です。ソト・マデュラとは様々なスパイスと共に牛の肺、脾臓、胃、大腸、そして脊髄付きの脊椎骨などを煮込んだスープで、これまでの JSSR travelling fellow たちが挑み、そのほとんどがお腹を下した恐怖のローカルフードです。われわれも果敢に挑戦しましたが、やはり2人とも具合を崩し、数日間トイレの住人となりました。

訪問した2施設では、英語での医学教育が浸透していました。訪問当初はやはり独特の訛りのため、リスニングに苦労しました。しかし、英語は international language であり、必ずしも正しい発音や文法ばかりにとらわれる必要はありません。意思疎通することが目的です。日本滞在経験のある医師から、日本の医師は英論文を沢山書いているのに英語のコミュニケーションが不得手であると指摘されました。われわれは、もっと積極的に英語で意見を海外に発信し、連携を取っていくことを求められています。

今回、年齢も得意分野も違う2人でアジアを訪問することで、東・西日本の医療情勢や、脊髄損傷などの基礎研究、さらに側彎症手術などに関しても日本の代表(?)として、訪問先の先生方と意見交換することができました。今回のことで初めて知りあった2人でしたが、訪問中はお互いが補足し協力しあい、大きなトラブルも無く、有意義な二週間を過ごしました。2施設からは大変な歓待を受け、とても恐縮するとともに、日本の諸先輩方が行ってきた国際交流の奥深さを知りました。これまで欧米偏重であったわれわれの興味がアジアに対しても大きく拡がり、世界の中の日本の位置や役割を確認できました。これからも“日本の臨床医”として、国際交流の発展に寄与したいと思います。

最後に、本 travelling fellowship 参加にあたり、多くのご協力を賜りました日本脊椎脊髄病学会国際委員会の先生方、滞在先の Luk 教授, Cheung 教授, Bambang 教授を始め、スタッフの皆様、訪問計画を立てる際に情報をご提供下さいました愛知医科大学整形外科の若尾典充先生、福井大学整形外科の中嶋秀明先生、一般病院であるにも関わらず2週間もの不在を了承いただきました広島赤十字・原爆病院及び東京都済生会中央病院の皆様へ、この場をお借りしまして感謝の意を表したいと思います。誠にありがとうございました。